

ミューズ NO. 30 平和のための博物館・市民ネットワーク通信

発行：2013年6月

編集：山辺昌彦、山根和代、安斎育郎

翻訳：瀧由里子、竹田敦子、今井てるみ、谷川佳子

イラスト：戸崎恵理子

事務局：戦争と平和の資料館ピースあいち 宮原大輔

住所：〒465-0091 名古屋市名東区よもぎ台2-820

Tel & Fax: 052-602-4222

石橋湛山平和賞について

山梨平和ミュージアム 浅川 保

山梨平和ミュージアム－石橋湛山記念館－では、昨年、開館5周年を記念し、新たに「石橋湛山平和賞」を創設した。これまで湛山の名前を冠した賞は、石橋湛山記念財団の「石橋湛山賞」と、早稲田大学の「石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞」の2つあったが、どちらも、学界、ジャーナリズムの世界で活躍した第一線の学者、ジャーナリストに与えられている。これに対して、「石橋湛山平和賞」は、特に、若者を主対象に、湛山の平和主義思想を広めようと意図したものである。

中高生の部、大学生以上の一般の部の2つに分けて、石橋湛山について、または、平和、平和主義等についてのエッセイ、論文、小論文を広く呼びかけた。中高生の部は山梨県内を中心に136件、一般の部は全国各地から36件と多数の応募があり、力作も多かった。

井出孫六選考委員長ら5名の選考委員で審査し、11月にマス・メディアに公表、12月23日に表彰式を行った。最優秀賞は、中高生の部が山梨英和高校の斎藤公美子さん（受賞作「未来の担い手として生きる」）、一般の部が大阪商大非常勤講師の望月詩史さん（受賞作「石橋湛山の二つの問い」）で、特に後者の作品は湛山についての本格的な研究論文であっ

た。

今年度も、協賛企業（団体）、後援団体等の支援を得て、実施していきたい（募集期間7月1日～9月30日を予定 詳細は、山梨平和ミュージアムまで）。全国からの応募を期待しています。



erico

アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」(wam)

館長 池田恵理子

この半年は、「慰安婦」問題に取り組んできた私たちには疾風怒濤の連続でした。第10回特別展『軍隊は女性を守らない～沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力』を開催中のwamにとって、昨年秋の沖縄へのオスプレイ配備と2人の米兵による強かん事件の発生は断じて許せない事態でした。幾度、緊急抗議行動に走り回ったことでしょう。それと並行して、沖縄展のセミナーを開きました。9月には沖縄に残留した元「慰安婦」・ペ・ポンギさんについて川田文子さん、金賢玉さんに語っていただき、10月には「沖縄戦を知る」のシリーズで林博史さん、謝花直美さんを招き、この2月には沖縄と性暴力をめぐるビデオ上映会「wam de video」に島袋マカト陽子さんと池田恵理子が登板しました。

日本は今、ファシズムの時代に逆戻りするのではないか…という大きな分岐点に立たされています。昨年末の衆議院選挙では、小選挙区制のマジックで右翼改憲派の政権が成立してしまいました。安倍首相は一貫して「『慰安婦』に強制連行の証拠はない」と主張してきた政治家。その影響は各方面にじわじわと表われています。12月、台湾の台北に8カ国の人々が集まった第11回日本軍「慰安婦」問題アジア連帯会議では、各国の被害者や支援者から日本の右傾化を憂慮する声が多くあがりました。

私たちが震撼とさせる事件が相次いで起こったのは、大阪。この2月、大阪府警は在日朝鮮人などを排斥し暴力的な差別発言を繰り返している「在日特権を許さない市民の会」(在特会)からの「被害届」を理由として、4人の仲間を「被疑者」にでっちあげ、「日本軍「慰安婦」問題・関西ネットワーク」の事務所などを家宅捜索したのです。これは警察による「慰安婦」問題解決運動への露骨な弾圧に他なりません。また大阪の橋下・松井コンビの市政・府政による「リパティおおさか」への圧力は昨年10月の全国交流会でも論じられましたが、この2月には松井知事が、「ピースおおさか」から南京大虐殺など旧日本軍の加害行為に関する展示を撤去したいと記者会見で述べています。このような策動には国内外の連帯を一層強めて、その暴走を食い止めなければなりません。

昨年12月は、wamの創設を呼びかけた松井やよりさんの没後10年を迎えたので、その記念イベントも行いました。ジャーナリストで女性運動の活動家だった松井さんは、2000年の女性国際戦犯法廷の提案者でかつ牽引者でしたが、沖縄への思い入れも強かった人です。嬉しいことに、このところ日本や韓国の若い女性研究者たちの中から、「松井研究」を始める人たちが出てきました。

wamではこの7月から第11回特別展として『日本人にされた阿媽(アマー)たちの戦争～台湾の慰安所と海外への連行～』展(仮)を予定しています。ただ今、そのための調査・研究とパネル作成の真っ最中です。この特別展にもどうぞご期待ください。

※編集者注:wamは、この程、日本平和学会第4回平和賞を受賞することになりました。授賞式は2013年11月9日、明治学院大学で開催される日本平和学会2013年度秋季研究集会の席上で行なわれます。なお、本誌編集者の一人である安斎育郎も同時受賞することになっています)

第五福竜丸展示館

公益財団法人第五福竜丸平和協会 安田和也

都立第五福竜丸展示館は、2013年1月25日に開館以来の通算来館者が500万人に達しました。1976年6月、原水爆のない世界、平和を願う市民の声と原水爆禁止の運動などのとりくみにより、東京都がこれを受けとめ展示館を夢の島公園内の施設として設置しました。開館以来、館の管理運営は、公益財団法人第五福竜丸平和協会が担ってきましたが、年間10万人超の来館者を維持することはなかなか難題です。都の社会教育施設として学校の見学・学習を大きくひろげていきたいと思ひますし、そのために現場の教員ともつながる様々な工夫が課題だと感じています。

さて、第五福竜丸の水爆実験被災一ビキニ事件から来年は60年となります。3月末までは、マーシャル諸島の人びと、とりわけロンゲラップ島の人びとの苦難の歩みを取り上げた企画展示をおこなっております。長さ7メートルにおよぶ「島の人びとと核実験の年表」を作成し、マーシャルの子どもたちの

写真パネルなどを展示しています。この展示は、終了後、「第五福竜丸とマーシャルの人びと」展にてパネル展の開催をよびかけています（パネル展などの詳細は電話 03 - 3521 - 8494 平和協会まで）。

来年にむけて、水爆実験、核開発がもたらせた被害、環境汚染、いまもつづく核兵器保有への危惧と今日の核問題を総合的にまとめ、現在と将来へむけての提起をおこなうための様々な分野の研究者との作業プロジェクトをすすめています。ビキニ事件—第五福竜丸の被災を展示館所蔵資料でたどる「新版・図録」の編集も5月ごろから本格化します。大震災から2年、福島原発事故を見つめながら、あらためて水爆開発の時代の科学者や人々のうごきをたどる作業も構想しています。

『NPO・中帰連平和記念館』近況報告

事務局・理事 芹沢 昇雄

昨秋の平和ミュージアムでの『交流会』ではお世話になりました。

皆様の様子が分かり勉強になりました。その後、交流会で一緒だった『山梨平和ミュージアム』に仲間と訪ね、浅川保様たちとも再会しました。

私たちの「記念館」は展示は無く中帰連の皆様様の供述書や手記、撫順戦犯管理所や戦争と平和関連の映像や写真、書籍など「資料館」という感じで開館から7年目を迎えました。もともと中古の倉庫を購入した建屋のため、資料室の床が傾き修理を予定しております。

仁木ふみ子・初代理事長が昨夏急逝し、現在、松村高夫理事長（慶応大学名誉教授）の下で、昨年から年3回の理事会や総会の後に、一般参加者を含め講師の先生にお願いし「勉強会」を開いております。

近いうちホームページやメーリングリストを設定する予定です。また、できれば「認定NPO」も目指したいと考えております。

今春4月24日に開館（一般公開25日）が決まった『満蒙開拓平和記念』にも、早速仲間と訪ねる計画を立てております。今後とも宜しく願い致します。（事務局・理事：芹沢昇雄）

立命館大学国際平和ミュージアムの2012年度後半期の活動報告：京都市

立命館大学国際平和ミュージアム
鳥井真木

2012年、国際平和ミュージアムは開設20周年を迎え、「地球市民の記憶と未来。世界へと発信する平和教育の新たな歩み」をキーコンセプトに多くの記念事業を実施しました。

2012年度、国際平和ミュージアムは東日本大震災と原発事故をめぐる多くの問題提起を行ない（春季特別展「放射能と人類の未来」、学生連続ミニ企画展「わたしたちにできること～震災1年を振り返って」）、現代の問題に取り組むとともに、過去の戦争の悲惨さと世界の現状を伝え（秋季特別展「未完の作品／永遠のはじまり—無言館収蔵作品から芸術の原点を考える」、「世界報道写真展2012」）、平和創造の必要性を訴えるメッセージを発信しました。

11月30日、国際平和シンポジウム「平和研究所の軌跡・課題・可能性」を開催し、平和研究の現状を踏まえた平和博物館の今後のあり方を提起し、学術・研究の領域へも博物館としての展開を行ないました。プログラム：記念講演：坂本義和（東大名誉教授）、挨拶：EU・シュヴェイスグート駐日大使、パネリスト：佐藤安信（東京大学）、古沢希代子（東京女子大学）、君島東彦（立命館大学）

また3月17日、中国、韓国などの海外の大学生を迎え「21世紀の平和課題と未来世代による主体的な学びへの期待」をテーマに、開設20周年記念学生企画「Forum for Peace Making（学生平和フォーラム）」を開催しました。

2013年は、「学徒出陣70年」、「わだつみ像建立60年」という節目にあたります。特に若者には、「わだつみ」が持つ意味を学習で深めていく必要があると思います。20周年事業の到達点を踏まえ、2015年「戦後70年」にむけて、戦後の平和憲法や平和教育の歩みの中で果たして来た役割と、さらに社会に発信するような事業計画を策定していきたいと考えています。

以下に、2012年度後半期に開催した展示・活動の一部を紹介します。

【特別展】

- 「世界報道写真展2012」9月19日（水）～11

月 18 日 (日) (京都・滋賀・大分) 講演: 恒成利幸 (朝日新聞社)

- 「未完の作品/永遠のはじまり—無言館収蔵作品から芸術の原点を考える」10 月 23 日 (火) ~12 月 1 日 (土) 鼎談: 野見山暁治 (洋画家)、窪島誠一郎 (無言館館主)、安斎育郎 (名誉館長)

【ミニ企画展】

- 第 76 回「第 6 回立命館附属校平和教育実践展示」10 月 14 日 (日) ~12 月 21 日 (金)
- 第 77 回「ウラジオストックにおける日露民衆交流の歴史と現在—『シベリア出兵』との関わりも含めて」2013 年 1 月 12 日 (土) ~2 月 3 日 (日)
- 第 78 回「京都青春時代—学生と戦争の風景」2 月 9 日 (土) ~4 月 7 日 (日)

【館長・名誉館長声明・見解】

- 日中の友好関係の発展にむけて (見解) (2012 年 9 月 21 日)
- イスラエル軍によるガザ地区への攻撃を批判し、イスラエル・パレスチナ双方による和平プロセス構築への真摯な努力を求めます (声明) (2012 年 12 月 6 日)
- 2013 年 2 月 12 日の朝鮮民主主義人民共和国 (北朝鮮) の核実験に対する緊急声明 (2013 年 2 月 18 日)

チェルノブイリのパネル (監修 今中哲二) 貸出について

小寺隆幸

平和博物館で福島原発事故などの展示を今後企画される際に、補助資料としてチェルノブイリのパネルを使いませんか。無料 (送料のみ負担) で貸し出します。

このパネルは 2006 年、チェルノブイリ 20 周年に際して、東京での集会をおこなった実行委員会が作成し、現在はチェルノブイリ子ども基金の小寺が管理しています。内容は旧ソ連の原子力開発と放射能汚染地域、チェルノブイリ事故の写真、住民避難の様子、石棺建設、放射能汚染地図、日本に飛んできた放射能測定データ、スウェーデン汚染地域でのガン増加、急性放射線障害、事故処理作業員のその後、現地住民の被害、食品汚染、IAEA の役割、被災地での生活、未来へ歩み出すチェルノブイリの子どものた

ち、国内救援団体の活動、日本の原発と事故写真などです。7 年前のものですが、今も使えるものです。アルミケース入り 34 枚、70cm×100cm、4 つの段ボール箱 (73×101×10) に梱包してあります。パネルの一部だけを貸し出すことも可能です。詳細なリストをご覧になりたい方、貸し出しを希望される方は小寺隆幸 kodera@tachibana-u.ac.jp までご連絡下さい。

平和資料館・草の家：高知

事務局員 中内愛

2012 年 8 月 29 日、「ハイサイ沖縄 バイバイオスプレ—辺野古、高江、そして普天間はいま 沖縄のたたかいに連帯して」と題して、映像作家の岡田竜平さんによる沖縄取材報告会が開かれました。岡田さんは同年 6 月末から沖縄入りし、名護市民会館で開かれた「辺野古座り込み 3000 日のつどい」や、高江のヘリパッド配備反対、現地の漁師さんに海からキャンプ・シュワブ周辺を案内してもらいながらのやりとり等の映像にコメントを交えながら、沖縄に住み、たたかい続ける人々の生の声を届けてくれました。参加者は約 30 名でした。

同年 9 月 1 日から 7 日にかけては、高知の反戦詩人・榎村浩 (まきむらこう) が詩に詠んだ「中国の間島を訪ねる旅 (中国・平和の旅)」で、県内外から 30 名 (内高知からは 20 名) が参加し、延辺朝鮮族自治州・延吉を訪ねました。現地では韓国在住の戸田郁子さん (作家・翻訳家) が、間島日本総領事館、旧日本総領事館地下にある当時の記憶を残す展示室、間島パルチザンの本拠地跡、朝鮮民族の聖地・白頭山天地等を案内して下さり、歴史を辿りながら、榎村の詩に思いを馳せて各地を巡りました。延辺大学の学生らと交流会もありました。また、今年 (2013 年 6 月) 中の発行を目指して、榎村浩生誕 100 周年記念のブックレット『ダットン海峡 10 号』を編集集中です。

同年 11 月 17 日には、「チェルノブイリの健康被害を検証して」と題して、NGO チェルノブイリ被害調査・救援 女性ネットワーク事務局長の吉田由布子さんを招いて講演会を開きました。(日本科学者会高知支部共催、伊方原発を止める高知県の会協賛) 放射線健康被害の過小評価に対して警鐘を鳴

らすとともに、特に女性や子どもに与える影響の検証を軸にしたチェルノブイリ健康研究から福島を問い、科学の視点から脱原発の思想を紡ぐお話を聴かせていただきました。参加者は約25名でした。

今年1月10日から2月9日まで、草の家ホールにて企画展「高天ヶ原山（たかまがはらやま）の戦争一本土決戦に向けて山に陣地をつくっていた航空兵たち」を開催しました。高知県南国市にある高天ヶ原山には、戦後、開発されたとはいえ、いまだにときを隔てて一部にアジア太平洋戦争の陣地跡が残っています。その陣地をつくり、捨て身の戦いを強いられていた当時未成年であった海軍航空兵たちの証言、壕やその周辺から発見されたものも併せて展示しました。来場者は合計で108名でした。

岡まさはる記念長崎平和資料館

理事長・高實康稔

2012年下半期の主な活動は以下のとおりです。

- ・7月1日：機関紙「西坂だより」66発行
- ・7月21日：第8回「岡正治さんに学ぶ会」を開催。韓国のキリスト教関係のグループに対する講話（1991年）のビデオが発見され、それを観て語り合った。
- ・8月14日～20日：当館の友好訪中団（5名）が「河北の三光作戦と南京」（「銘心会南京」の訪中団と合同）の旅。今回も学生の参加応募がなかったことは残念であった。
- ・9月1日：連続公開市民講座「もう一度学ぼう！日本の近現代史」第Ⅲ期の第1回「満州事変、なぜ戦争とは呼ばなかったのか」（講師、葛西洋子さん）
- ・10月1日：機関紙「西坂だより」67号発行
- ・10月13日：「日本の近現代史」第2回講座「日中戦争とは、どんな戦争だったのか」（講師、奥山忍さん）
- ・10月14日：「オレの心は負けてない～在日朝鮮人元日本軍「慰安婦」宋神道のたたかい～」を上映。日本政府に謝罪と賠償を訴える多くの感想が寄せられた。
- ・11月10日：「日本の近現代史」第3回講座「南京大虐殺の真実」。拡大特別講座とし、「銘心会南京」代表の松岡環さんの講演「加害者と被害者の調査から南京大虐殺を見る」。被害の実態が加害者の証言映

像によって裏付けられ、受講者に深い感銘を与えた。

- ・11月23日：第10回総会。認定NPO法人を目指すことが決議された。
- ・12月16日：第12回「南京大虐殺生存者長崎証言集会」。生存者の余昌祥(Yu Chang Xiang)さん（1927年生まれ）の証言と南京大虐殺記念館の李玉榮さん(Li Yu Rong)の解説。日本軍の目を逃れて地下水道に潜伏した余さんの体験は言語を絶する酷いもので、大虐殺の真実を彷彿とさせた。
- ・12月15日：「日本の近現代史」第4回講座「皇民化政策下の植民地、台湾と朝鮮」（講師、新海智広さん）

<http://www.d3.dion.ne.jp/~okakinen>

ひめゆり平和祈念資料館

学芸課 前泊克美

2012年度企画展「生き残ったひめゆり学徒たち—収容所から帰郷へ—」

2012年6月に発行した『資料集5 生き残ったひめゆり学徒たち—収容所から帰郷へ—』の関連企画として、2012年度企画展「生き残ったひめゆり学徒たち—収容所から帰郷へ—」を開催中です。13枚のパネルと新作証言映像「生き残ったひめゆり学徒たち」、実物資料(当時の在校生の消息を求めた名簿や、亡くなった生徒の父がしたためた「弔の言葉」など)を通して、生き残ったひめゆり学徒たちの「収容後」を伝えています。

大人ばかりではなく、修学旅行の中高校生も映像や展示物を真剣に見ている様子が見受けられ、「生き残った人もつらい思いを抱えていたことが分かった」「遺族に会うことがつらいと知った」などの感想が寄せられています。当初2013年3月31日までの開催予定でしたが、好評につき会期を延長することになりました（6月頃まで）。

長崎の被爆者とひめゆりの交流会

2013年2月5日に「長崎平和を歌う合唱団」、被爆者歌う会「ひまわり」とひめゆり学徒隊生存者との交流会を行いました。被爆者歌う会「ひまわり」は、67歳から87歳の被爆者で構成されていて、世界で唯一の被爆者だけの合唱団です。2012年の沖縄全戦没者追悼式で朗読された首里高校の生徒の詩に感銘を受けた同会が合唱曲に仕上げ、その曲の披露

もかねて訪沖し、当館にも総勢 55 名で訪問して下さいました。交流会ではお互いの戦争体験を聞いたあと、合唱曲「礎に思いを重ねて」を披露して頂きました。素晴らしい歌声に涙を浮かべるひめゆり学徒隊生存者もいました。

沖縄と長崎、同じ戦争を体験した者同士、「二度と戦争をしてはいけない」という思いを再確認し合う場となりました。

立命館大学国際平和ミュージアムでの企画展を通じた日露交流の新たな体験

日本・ウラジオストク協会理事 平和友の会会員
堀江満智

極東ロシアの中心都市ウラジオストクがいま注目されているが、その素顔や日本との関係史はあまり知られていない。2013 年 1 月 12 日～2 月 3 日に「ウラジオストクにおける日露民衆交流の歴史と現在—『シベリア出兵』との関わりも含めて—」というミニ企画展を、立命館大学国際平和ミュージアムで、日本・ウラジオストク協会の主催でおこなった。

戦争や抑圧、不信の時代が続いた日本とロシアだが、それでも国策に拘わらず友好と共存をめざした民衆の心があった。明治以来変わらぬ庶民のその姿、今日日本文化を楽しむロシアの若者のはじける笑顔や街の様子を、写真を中心に書籍や年表もそえて展示した。

当ミュージアムはロシア国立沿海地方アルセーニエフ記念総合博物館と 2012 年に学術交流協定を結び、同博物館の協力を得た展示会で、館長、研究員が来日されて勉強会等もおこない、ウラジオに残る日本人の足跡の保存への努力も話された。これらは両国の未来志向の関係、ひいては平和な日本海の構築への小さな貢献になったのではないだろうか。

今企画展の展示品のお貸出が可能です。往復送料をご負担いただけるようでしたら、展示品の貸出料は無料です。詳細はお問い合わせください。

日本・ウラジオストク協会
156-0052 東京都世田谷区経堂 5-8-5 中本方
Tel&Fax : 03-3425-6183
E-mail: jpvlad@tc.at.ne.jp

“ANNE FRANK Meet and Learn”

NPO 法人グローバルプロジェクト推進機構（通称 JEARN）では、この度 7 名の発起人で “ANNE FRANK Meet and Learn” を立ち上げました。

主な活動は、オランダの ANNE FRANK House から託された ANNE の大型パネル 34 枚（日本語）の日本国内展示です。2009 年上智大学で開催されて以来、多くの大学・学校・博物館・地域の展示会場で多くの人々が ANNE に会い向き合ってきました。

今、今年開催地を募集しております。パネル展開催の条件は、次の開催地までの送料を負担するというものです。パネルの他に、英語/日本語ビデオ、本なども一緒です。ご希望があれば E-Stage「アンネ フランクーアンネの日記より」ミュージカル DVD の用意もします。まずは沖縄尚学高校で展示準備（パネルの搬送・組立・収納）をしている生徒たちの写真をご覧ください。

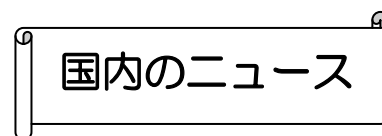
<http://www.oki-wide.com/iearn/okisho/panels/>
そして「ANNE FRANK パネル展」開催を希望される時期をお知らせください。この大型 34 枚のパネルが、更に多くの皆さんの目に触れる機会を企画してください。

申込み・問合せ先：JEARN 高槻事務局 072-680-2115 高木 洋子 (JEARN) Yoko Takagi <e-mail: yoko@jearn.jp>

JEARN (<http://www.jearn.jp/japan/>)

ANNE FRANK

(<http://gcpej.jimdo.com/link/annefrank/>)



○名寄市北国博物館：北海道

企画展「戦争体験を語り継ぐパネル展」が 2012 年 10 月 19 日～28 日の会期により、企画展「戦争体験を語り継ぐパネル展2」が 2012 年 12 月 21 日～2013 年 1 月 13 日の会期により、いずれもギャラリーホールで開催されました。戦争を体験した世代が高齢化する中、次世代に語り継ぐ役割を担おうと、2011 年に、委託事業として 24 人の名寄市民の証言を聴き取

り、DVD を制作しました。この内容をパネルにして、戦時中に使った水筒や毛布などや写真とともに展示し、より多くの方に紹介する企画展でした。

Tel:01654-3-2111

<http://www.city.nayoro.lg.jp/www/contents/1250058541686/index.html>

○群馬県立近代美術館：高崎市

企画展示「破壊された都市の肖像 ゲルニカ、ロッテルダム、東京・・・」が展示室 1 で 2013 年 1 月 19 日～3 月 24 日の会期により開催されました。20 世紀は歴史上初めて一般市民を大量に殺戮する戦略爆撃が行われ、人類史上前例のないほどの悲惨な都市の破壊が重ねられました。パブロ・ピカソ《ゲルニカ(タピスリ)》、オシップ・ザッキン《破壊された都市》、井上有一《東京大空襲》連作、《噫横川国民学校》、ヘンリー・ムーア《奉献(三人の女性と子供)》など、無差別爆撃を主題にした美術作品を、戦争と美術というテーマのもと特集したものです。一般市民への無差別虐殺という戦争の非人間的側面を、美術はどのように表現し、対峙したのかを問うものでした。

関連して、記念講演会「井上有一の書」が海上雅臣さん(美術評論家・ウナクトウキョウ主宰)を講師に 3 月 10 日に開かれました。

Tel:027-346-5560 Fax:027-346-4064

<http://mmag.pref.gunma.jp/>

○埼玉県平和資料館：東松山市

2012 年度テーマ展Ⅱ「寄贈資料が語る戦時の記憶—平成 23 年度収集資料を中心に」が企画展示室で 2012 年 12 月 1 日～2013 年 2 月 24 日の会期により開催されました。資料館では、戦争に関する資料や、戦中～戦後期の生活用品などを収集し、保管しています。2011 年度は、22 人から計 581 点の、戦争に関する資料や、戦中～戦後期の生活用品などの資料が寄贈されました。本展では資料が語る戦時の記憶に耳を傾けてもらうために、その中から、「戦時下の暮らし」(軍事郵便葉書や配給関係資料などから、当時の暮らしや世相を紹介)、「戦争と装い」(将校の軍服、予科練生の制服や、水筒・弁当箱・軍隊手帳などを紹介)、「親子二代の戦争」(日露戦争に従軍した父と、日中戦争に従軍した息子。それぞれの戦

争を追う)、「戦争と教科書」(戦争が教育に及ぼした影響と、子どもたちの戦争への意識をたどる)の 4 つのテーマを設けて約 100 点を紹介していました。他に ①冬の暮らし ②帰らなかった父 ③戦争は終わった の 3 つのコラム展示もありました。

Tel:0493-35-4111 Fax:0493-35-4112

<http://homepage3.nifty.com/saitamapeacemuseum/>

○東京大空襲・戦災資料センター：江東区

特別展「空襲を伝えるドイツの都市(まち)——ドレスデン・ベルリン・ハンブルク」が 2 階会議室で、2013 年 2 月 16 日～4 月 7 日の会期により開催されました。2012 年 2 月、東京・大阪から日本の空襲体験者や市民が、ドイツの空襲被災都市・ドレスデン、ベルリン、ハンブルクを訪れ、市民と交流しました。ドイツでの多くの市民による、自国の加害をふまえつつも、空襲を忘れないための行動やかつての交戦国と和解する取り組みを写真パネルで紹介するとともに、あわせてドレスデン空襲の被害を記録する文書資料を借りて展示するものです。

関連して、2013 年 2 月 23 日にはオープニングイベントを、2 月 23 日には南守夫さん(元愛知教育大学教授・ドイツ現代史)の「空襲展示の意義と課題—日本とドイツの空襲展示の比較を通して考える」の公開研究会、3 月 16 日には、ドイツから招いた「ドレスデン 1945 年 2 月 13 日グループ」のノイツナーさんの「ドレスデン空襲はいかに記録されてきたか」の講演会、3 月 23 日には親子企画「クwestナーを知っていますか?」が、それぞれ開かれました。

「東京大空襲を語り継ぐつどい—東京大空襲・戦災資料センター 開館 11 周年」がカメラホールで 2012 年 3 月 9 日に開催されました。吉田裕さん(一橋大学教授、公益財団法人政治経済研究所評議員)の記念講演「アジア太平洋戦争と東京大空襲」のほか、横笛の演奏、体験者のはなし、空襲体験証言映像作品の上映などがありました。

Tel:03-5857-5631 Fax:03-5683-3326

<http://www.tokyo-sensai.net/>

○高麗博物館：東京・新宿区

展示「植民地支配を考える—巨大な監獄、植民地に生きる」が 2012 年 8 月 29 日～12 月 28 日の会期

で開催されました。今回の展示では植民地支配の実態を知るために、民族問題研究所が「韓国併合」100年の2010年に制作し、立命館大学コリア研究センターが2011年に翻訳したパネルと、日帝時代のアルバム・複製本を展示していました。

Tel&Fax:03-5272-3510

<http://www.40net.jp/~kourai/>

○すみだ郷土文化資料館：東京

企画展示「描かれた戦争孤児－孤児たちの心と表現」展が2013年3月9日～5月12日の会期で開催されました。

Tel:03-5619-7034 Fax:03-3625-3431

http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryou/kyoudobunka/index.html

○緑図書館：東京・墨田区

資料展「すみだと災害資料展－戦災・震災・水害」が1階展示コーナーで、ミニ文学展「災害とすみだゆかりの文学者」が3階展示ケース内で、2013年3月9日～24日の会期により、それぞれ展示されました。第161回「すみだ文化講座－災害と女性」が原島早智子さんを講師に2013年3月10日に開かれました。

Tel:03-3631-4621 Fax:03-3631-4660

http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/library/annai/midori.html

○憲政記念館：東京・千代田区

2012年特別展「昭和、その動乱の時代－議会政治の危機から再生へ」が2階展示室で2012年11月8日～11月30日の会期により開催されました。今回の特別展では、普通選挙が実施されて以降、政党内閣の崩壊とともに軍部が台頭し、翼賛体制となった後、太平洋戦争を経て、政党が復活するまでの歩みを関係資料により紹介していました。展示解説書を刊行しています。

Tel:03-3581-1651 Fax:03-3581-7962

http://www.shugiin.go.jp/itdb_annai.nsf/html/statistics/kensei/kensei.htm

○昭和の暮らし博物館：東京・大田区

「小泉家に残る戦争」展が2012年8月1日～31日の会期で開催されました。千人針、防空頭巾、金属製品の“代用品”、小泉家で焼け残り、柄が変色したコーヒーカップなどの、小泉家に残っている戦時中・戦後の暮らしに関わるものをまぢかに見て、庶民の暮らしを襲った戦争の理不尽さと平和の大切さを改めて感じてもらうために、例年8月に開かれるものです。

Tel&Fax 03-3750-1808

<http://www.showanokurashi.com/>

○通信総合博物館「ていぱーく」：東京・千代田区

企画展「軍事郵便展－戦地からの便り」が3階企画展示場で2012年8月1日～31日の会期により開催されました。専修大学文学部新井勝紘研究室による展示も行われました。

Tel:03-3244-6811

<http://www.teipark.jp/>

○早稲田大学大学史資料センター：東京・新宿区

企画展「ペンから剣へ－学徒出陣70年」が会津八一記念博物館1階の企画展示室で2013年3月25日～4月27日の会期により開催されました。2013年は学徒出陣から70年の年です。在学のまま入営・入隊し、二度と学窓に還ることのなかった学徒たちの遺品を通してその学生時代を振り返るとともに、彼らが何を思い、考えていたのかを追想するものでした。

Tel:03-5286-1814 Fax:03-5286-1815

<http://www.waseda.jp/archives/>

○武蔵村山市立歴史民俗資料館：東京

ミニ企画展「武蔵村山の戦争資料」が2013年3月10～31日の会期で開催されました。

Tel:042-560-6620 Fax:042-569-2762

<http://www.city.musashimurayama.lg.jp/shiryokuan/index.html>

○川崎市平和館：神奈川

2012年度川崎市平和館開館20周年記念企画展「メディアから考える平和」が1階屋内広場で2012年11月14日～12月13日の会期により開催されました。パネル展示では、報道メディアがこれまで武力紛争に果たしてきた役割や、インターネットのインパクト等についての概説のほか、草の根からの情報発信を行うNGOの取り組みや、高校生、大学生の考えるメディア問題について紹介していました。

企画展イベントの第1回「ユースと語るメディア」は2012年11月17日に毎日新聞社の中野彩子さんをモデレーター及び講師にして、企画展に出展した学生によるプレゼンと来場者とのディスカッション及び総括を含めた講演をおこないました。

第2回イベント「日本平和学会と考えるメディア」は2012年12月1日に明治学院大学の高原孝生さんと東京大学の石田淳さんをファシリテーター及び講師として、ドキュメンタリーを素材として使ったワークショップをおこないました。

「川崎大空襲記録展」が屋内広場で2013年3月9日～5月6日の会期により開催されました。川崎大空襲の日(4月15日)を中心として毎年開かれているもので、2013年は平塚空襲の展示や子どもたちの平和に関する発表の展示もありました。展示初日の3月9日にオープニングイベントが屋内広場で開かれ、空襲体験者の話や子どもたちの発表がありました。

Tel:044-433-0171 Fax:044-433-0232

<http://www.city.kawasaki.jp/25/25heiwa/home/heiwa.html>

○明治大学平和教育登戸研究所資料館：神奈川・川崎市

第3回 明治大学平和教育登戸研究所資料館企画展「キャンパスに残っていた偽札印刷工場—5号棟調査報告」が2012年11月21日～2013年3月2日の会期で開催されました。5号棟は、陸軍登戸研究所の偽造法幣(中国蒋介石政権の紙幣の偽札)を製造していた第三科に属する建物でした。1939年前後に建設されたものと推定され、建物そのものの老朽化とキャンパスの整備計画推進のために、2011年2月下旬から3月上旬にかけて解体されました。5号棟は、長年にわたって実験室・倉庫として使用され

ていたため、内部の各部屋には実験器具や種々雑多な物品が詰め込まれており、室内の調査すら満足にできない状態でした。しかし、解体にともなう整理と調査の結果、従来から「倉庫または印刷工場」と推定されていましたが、偽札の印刷工場であった可能性が高まりました。今回の企画展では、解体時の調査報告・明治大学で発見された図面や映像・川崎市を代表する写真家・小池汪氏撮影の写真から5号棟が戦前どのような役目を担っていたのかを探るものでした。

Tel&Fax:044-934-7993

<http://www.meiji.ac.jp/noborito/index.html>

○柏崎市立博物館：新潟

特別展「資料が語る戦争の記憶」が2012年10月20日～11月25日の会期で開催されました。博物館には、満州柏崎村開拓団の記録写真や、出征のぼり、軍隊手帳、陣中鏡、千人針など昭和の戦争に関する資料が収蔵されています。それらを展示紹介することにより、資料が語りかける戦争の記憶を見つめ直し、「戦争とは、平和とは何か」を考えるものでした。

関連して講演会「柏崎市の分村満州柏崎村開拓団」が元柏崎村開拓団家族の巻口弘さんを講師に2012年11月3日に博物館小ホールで開催されました。

Tel:0257-22-0567 Fax:0257-22-0568

<http://www.kisnet.or.jp/~k-museum/institution/index.html>

○静岡平和資料センター：静岡市

企画展「戦争と動物たち」が2012年11月9日～2013年2月24日の会期で開催されました。先の戦争では、数十万頭の馬やたくさんの犬、鳩などが、「物言わぬ兵士」として戦場へ連れて行かれたまま帰ってきませんでした。毛皮を取って兵士の防寒具にするため、子どもたちの愛犬、愛猫も強制的に供出させられ、うさぎを飼うことが奨励されました。動物園やサーカスでは空襲のときに逃げ出すと危ないという理由や、食糧難によるえさの欠乏で、象・虎・ライオン・熊などの猛獣をつぎつぎに毒殺したり、餓死させたりしたのです。戦争の陰に、語られ

ることのないまま、消えていった動物たちがいました。戦火に葬られた動物たち、もの言わぬ戦争犠牲者たちの展示をとおして、子どもたちが戦争について考えるきっかけにしたいと展示したものです。

企画展「戦を憎む 藤枝出身の画家 平野亮彩 人と作品」が2013年3月8日～5月26日の会期で開催されました。「私は、将来、楽しい絵描きになろうと思ったのですが、いつの間にか戦を憎む絵描きとなってしまいました…」、亮彩が逝去(2011年5月)直前に残した言葉です。画家・平野亮彩(本名:貞一)は藤枝市岡部町出身です。戦争中は海軍航空隊に所属し、戦争で兄や従兄弟、多くの戦友を失いました。戦後は印刷会社の画室に勤務し、絵本のイラストや百科事典の挿絵などを描く絵師として活躍しました。40代後半、休養中に訪れた埼玉県東松山市で出会った、画家・丸木位里(「原爆の図」で知られる)に誘われて東松山へ居を移し、「自分の絵」を本格的に描き始めます。常に心にあるのは、亡き兄や戦友たちへの鎮魂の想い、そして平和への祈りでした。80歳を過ぎてからも、その想いは尽きることなく、祈りを絵にぶつけるように描き続けました。
<http://homepage2.nifty.com/shizuoka-heiwa/>
Tel&Fax:054-271-9004

○京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアム:京都市

企画展「京都・伏見の戦争と師範学校」が2012年11月10日～12月7日の会期で開催されました。今から70年ほど前、京都・伏見は旧陸軍第16師団が駐屯する「軍都」でした。現在、京都教育大学が位置する土地にも歩兵連隊が駐屯し、また、まなびの森ミュージアムはかつての旅団司令部を改装した施設です。今回の企画展では、教育大学の前身である師範学校にとっての戦争がどのようなものであったかを整理し、同時に、今に残る戦争の遺産が平和学習に果たすことのできる役割を模索するものでした。

関連して、講演会「映像でよみがえる京都府女子師範学校と桃山高等女学校」がF棟大講義室2で2012年11月11日に伊藤悦子さん(教育学科教授)と岡部美香さん(教育学科准教授)を講師に開かれました。図書館のかたすみで眠っていた16mmフィルムには、70年前の女子学生の姿があざやかに残され

ていました。最近発見された映像をとおして、本学の前身である京都府女子師範学校と、そこに併設されていた桃山高等女学校の教育を読み解くものでした。

Tel:075-644-8840

<http://manabinomori.kyokyo-u.ac.jp/manabinomori.html>

○ピースおおさか 大阪国際平和センター:大阪市

ピースおおさか収蔵品展Ⅲが1階の特別展示室で2013年1月15日～3月31日の会期により開催されました。奉安庫、1トン爆弾の破片など約70点の実物資料、空襲パノラマ画、従軍絵画など約80点の写真・絵・映像資料を展示し、戦争と平和の意味について考えるものでした。

太平洋戦争開戦71年目の平和祈念事業として、「講演会と歌で検証する「戦争」と「平和」」が2012年12月9日に1階講堂で開催されました。第1部の講演会では、宝塚大学教授の朝野富三さんによる「「三畳小屋」の伝言 陸軍大将 今村均の戦後」の講演がおこなわれました。今村均は戦後、戦犯として刑に服し、その後は質素な三畳の小屋でひっそりと暮らしていました。今村均が何を思い、何を伝えたかったのかを語りました。第2部では、ナビゲーター:もず唱平理事、歌:高橋樺子さん、ピアノ:田中裕子さんと「歌のステージ」が催されました。戦後、フィリピンのモンテルパの捕虜収容所で死刑判決を受けていた日本人のBC級戦犯の命を救った「ああモンテルパの夜は更けて」やシベリア抑留の兵士の間で歌われていた「異国の丘」など、戦争と平和をテーマにした曲が披露されました。

大阪大空襲 平和祈念事業「忘れない あの日のことー空襲写真を検証する」が2013年3月3日に1階講堂で開かれました。戦後68年目に入り、空襲を体験された方は少なくなっています。実際の体験は無くてもあの惨禍を次の世代に語り継ぐという“語り継ぎ部”の育成が今求められており、これに答える企画です。小田康徳(大阪電気通信大学教授)さんが「空襲被災写真から検証する 大阪・堺・豊中市の空襲」と題して話しました。68年前の3月の第1次大阪大空襲によって卒業式が中止となり、卒業証書を受け取ることができなかった、当時の国民

学校6年生の方に、証書（記念品）を授与する「幻の卒業式」もありました。

冬休み・親子まつり「野坂昭如戦争童話集&平和紙芝居」が1階講堂で2012年12月23日・25日～27日に開かれました。

春休み 親子まつりが1階講堂で2013年3月22日、24日、26日、3月27日～29日、4月3～5日、7日に開かれ、野坂昭如の「戦争童話集」（アニメ映画）が上映されました。

Tel:06-6947-7208 FAX:06-6943-6080

<http://www.peace-osaka.or.jp/>

○リパティおおさか 大阪人権博物館：大阪市

第67回特別展 全国水平社創立90周年記念「水平社の時代」が特別展示室で2012年9月11日～11月25日の会期により開催されました。1922年3月3日、今日の部落解放運動の原点となる全国水平社が創立されました。2012年は、全国水平社の結成90周年にあたります。「賤民廃止令(解放令)」以降もなくならなかった部落差別を撤廃して水平な社会を確立させようと活動した全国水平社は、差別糾弾闘争や生活擁護闘争だけでなく労働者や農民との共同闘争を展開しました。やがて、全国水平社はアジア太平洋戦争のもとで戦争に協力し、他の運動と合流し1942年1月に消滅しました。また、全国水平社が展開する水平運動と並んで、部落民衆と一般民衆との融和を実現しようとする融和運動も展開されました。融和運動もまた部落差別の撤廃に重要な役割を果たしました。本展は、水平運動と融和運動が部落差別の撤廃のためにどのような活動をおこなったかをさまざまなテーマから明らかにし、その今日的な意義について考えようとするものでした。展示構成は、「水平社の前夜」（『部落台帳』、『民族と歴史（特殊部落研究号）』）、「水平社の思想」（創立大会「綱領・宣言・則・決議」・岩崎水平社の荊冠旗など）、「水平社の活動」（『水平新聞』、『人類愛』第2号など）、「水平社の人々」（『特殊部落一千年史』、『水平の行者』など）、「水平社と融和」（『融和時報』、『融和事業年鑑』など）、「水平社と女性」（『全国水平社第二回大会状況報告』、『関東水平運動』など）、「水平社と事件」（『この差別を見よ』、『高松差別裁判闘争ニュース』第1号、第5号、臨時号など）、「水平社と戦争」（「水平社長野県聯十五

周年記念大会」ポスター、『青年同盟』号など）、「水平社と報道」（『時事漫画(水平運動号)』など）でした。

関連して、シンポジウム「歴史のなかの水平運動と融和運動」が研修室2で2012年9月30日に手島一雄（立命館大学）さん、駒井忠之さん（水平社博物館）を報告者にして開かれました。

Tel:06-6561-5891 FAX:06-6561-5995

<http://www.liberty.or.jp/>

○姫路市平和資料館：兵庫

秋季企画展「本土空襲と手柄山慰霊塔－慰霊塔に込められた平和へのデザイン」が2階展示室で2012年9月29日～12月24日の会期により開催されました。姫路市平和資料館に隣接する一般に「手柄山慰霊塔」と呼ばれているモニュメントは、正式には「太平洋戦全国戦災都市空爆死没者慰霊塔」といいます。太平洋戦争において、日本はそれ以前の外地で戦われた戦争では経験がなかった本土への空爆によって、数多くの一般市民が犠牲となりました。彼らの霊をなぐさめるとともに、世界の恒久平和を願うというのが同慰霊塔の建設趣旨です。建設当時、姫路市は人口20万人にも満たない規模の一地方都市でした。空爆の被災都市としては他に東京や大阪、名古屋などの大都市が揃っていたのにもかかわらず、全国的に意義のある慰霊塔がこの姫路の地に建てられたのです。今回の展示では、日本本土への空襲がどのような形で実行され、どれだけの方が犠牲になったのか、そして彼らを慰霊するためのモニュメントがどのような経緯でこの姫路の地に建てられることになったのかを追っていました。展示資料数は実物資料が約230点、写真資料が約60点でした。展示資料リストを作成しています。

関連して、姫路空襲体験談を聞く会が高谷日出男さんを講師として2012年10月28日に開かれました。

収蔵品展「姫路空襲・復興と姫路のまつり」が2階展示室で2013年1月12日～3月24日の会期により開催されました。資料館は、市内外の方々から太平洋戦争当時の現物資料の寄贈を受けています。この資料の中からテーマを絞って毎年収蔵品展を開催しています。今回は、「姫路空襲・復興と姫路のまつり」をテーマに展示会をおこないました。播磨は

屈指の祭りどころであるといわれています。海、山、川そして豊かに広がる町や村。美しい自然と人情味あふれた地域です。そのような多様で豊穡な環境を背景に、古来、多彩な祭りが繰り広げられてきました。しかし、太平洋戦争でB29爆撃機による空襲を受け、姫路の市街地は焦土と化し、神社や寺も焼失して多くの祭りは中断されてしまいました。終戦後の混乱期の中、戦災の痛手から徐々に立ち直り、町の復興に燃える姫路市民は、以前の賑わいを取り戻そうと祭りを復活はじめました。多くの方から寄せられた、当時の様子を語りかける収蔵品を、姫路の祭りの視点を通して展示するものでした。展示資料数は実物資料が約400点、写真資料が約40点でした。展示項目は「姫路の空襲」(入営祝幟、軍服、軍袴、軍帽、作業衣、記章、煙草入など)、「戦争被害や影響を被った神社・仏閣」(寄書き、絵画、旭日旗、焼夷弾、砲弾、電灯覆など)、「姫路の戦後復興」(本、色紙、写真、下賜品、レコード、楽譜、歌詞カードなど)、「戦後復興とともに復活された祭り」(絵葉書、百人一首、レコード、しるべ、説明書など)、「その他の姫路の祭り」(切手、歌集、レコード、福券など)、「新着資料コーナー」(奉公袋、銚子、ちょこ、お守、辞書、教科書、額、氷嚢吊り、竿はかり、精密斤量など)でした。

関連して、姫路空襲体験談を聞く会が田路信一さんを講師に2013年2月11日に開かれました。

Tel:079-291-2525 Fax:079-291-2526

<http://www.city.himeji.lg.jp/heiwasiryu/>

○奈良県立図書館戦争体験文庫企画展示：奈良市

戦争体験文庫企画展示「病院船の上で～日赤奈良班看護婦の手記から③」が2012年9月29日～12月27日の会期で開催されました。「日赤奈良班看護婦の手記から」第3弾として、病院船や内地の軍病院で看護にあたった日赤看護婦たちの手記を紹介しています。

戦争体験文庫企画展示「原爆の惨禍を目のあたりにして～日赤奈良班看護婦の手記から④」が2013年1月5日～3月28日の会期で開催されました。「日赤奈良班看護婦の手記から」の第4弾として、広島原爆の爆心にほど近い大竹の海兵団に派遣され、原爆救護にあたった日赤看護婦などの手記を紹介して

います。

Tel: 0742-34-2111 Fax: 0742-34-2777

<http://www.library.pref.nara.jp/sentai/kikaku.html>

○岡山空襲展示室、開館：岡山市

岡山市北区駅元町15-1のリットシティビル5階に、岡山シティミュージアムに隣接して、2012年10月1日に開館しました。アメリカや日本の空襲資料の研究を踏まえて、空襲やその被害、そして空襲に備えた暮らしなどを展示しています。展示目録を作成しています。

Tel:086-898-3000 Fax:086-898-3003

<http://www.city.okayama.jp/okayama-city-museum/index.html>

○広島平和記念資料館：広島市

2012年度第2回企画展「君を想う～あのときピカがなかったら」が東館地下1階展示室(5)で2013年2月8日～7月15日の会期により開催されました。1945年8月6日、世界で初めて広島に原爆が投下されました。あの日を境に、大切な人やものを奪われ、自らも傷つき、人びとはどのように生き抜いてきたのでしょうか。「あのときピカがなかったら・・・」。人びとは幾度そう思ったでしょう。この企画展では、多くの遺品を中心に、原爆によって亡くなった人びとや家族を失った人びとの思いを紹介し、一瞬にして人びとの生活を一変させ、被爆から67年経った今なお人びとを苦しめる原爆被害について考えてるものです。

公開講座「米軍の写真偵察と原爆投下」が徳山工業高等専門学校教授工藤洋三さんを講師に、2月2日に開かれました。工藤さんが長年にわたり収集してきた資料の中から、米軍の写真偵察機が記録した写真などを中心に、写真偵察の記録をたどり、米軍側から見た原爆投下の過程について視覚的に分析、解説しました。

Tel:082-241-4004 Fax:082-542-7941

<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/>

○国立広島原爆死没者追悼平和祈念館：広島市

企画展「ヒロシマ復興への歩みー被爆後の混乱を生き抜く」が地下 1 階の情報展示コーナーで 2013 年 1 月 1 日～12 月 28 日の会期により開催しています。1945 年 8 月 6 日、一発の原子爆弾により、広島は一瞬にして破壊され、多くの尊い生命が無差別に奪われました。原爆で家族を失い、自らも傷ついた人びとは食糧や物資の不足に苦しめられ、放射線の後障害におびえながらも生活再建へと歩み始めました。企画展では被爆者の「こころ」と「ことば」にふれてもらうために、被爆後の混乱の中を生き抜いた人びとの姿と復興への歩みを体験記を通じて紹介しています。体験記 17 編と関連資料 21 点を展示しています。

Tel:082-543-6271 Fax:082-543-6273

<http://www.hiro-tsuitokinenkan.go.jp/>

○松山市立子規記念博物館：愛媛

特別展「水野広徳ー軍服を脱いだ平和主義者」が 3 階特別展示室で 2012 年 12 月 15 日～2013 年 2 月 11 日の会期により開催されました。水野広徳は、海軍軍人として日露戦争に参戦。日本海海戦を実録した戦記「此一戦」がベストセラーとなり、海外にも翻訳されました。その後、第一次世界大戦を視察したことから、世界平和の重要性を痛感し軍を引退し、軍事評論家となり、非戦論を多数発表しました。特に、1932 年に刊行した「打開か破滅か 興亡の此一戦」では、日米開戦による日本の苦戦や東京大空襲を予言するなどして反戦を主張しました。1945 年、第二次世界大戦の終結を見届け、疎開先の今治市で病没しました。特別展では広徳の遺品や原稿、刊行物など 105 点を展示し、軍人、作家、平和主義者として活躍した生涯を紹介するとともに、同郷の軍人、秋山好古・真之兄弟との交流を裏付ける書簡類なども展示していました。

Tel:089-931-5566 Fax:089-934-3416

<http://sikhaku.lesp.co.jp/>

○碓井平和祈念館：福岡・嘉麻市

企画展「戦争体験者が伝えるもの」展が 2012 年 7 月 31 日～8 月 22 日の会期で開催されました。2012 年の春に亡くなった版画家香椎敬介さんが、戦争で

フィリピンに出兵した自らの体験をもとに、山中を放浪する日本兵の姿や、収容所の様子などを描いて「終戦忌」シリーズの版画 7 点、晩年を小竹町で過ごした吉川末廣さんが、旧ソ連軍の捕虜となり抑留された体験を水彩画と文章でつづった作品、戦争の不条理や悲しみを表現した作品で世界的に知られる浜田知明さんの彫刻など 38 点など、嘉麻市が所蔵する戦争をテーマにした版画や彫刻などを展示しました。作品を通して、平和への思いを深めてもらうために開かれたものです。

関連して、筑豊地区在住の戦争経験者 3 人が当時の体験談を伝える「語り、伝える戦争の話」が 2012 年 8 月 18 日に開かれました。

Tel:0948-57-3176

○兵士・庶民の戦争資料館：福岡・小竹町

「戦地で作ったガリ版戦記」展が 2012 年 7 月 7 日～8 月 31 日の会期で開催されました。太平洋戦争で戦死した兵士への追悼文集 6 冊が展示されました。追悼文集には、前館長の武富登巳男さんが所属した偵察部隊で、初の戦死者が出た 1942 年 2 月、「少しでも士気を上げよう」と上官の発案で作られ、戦死した兵士の遺骨の代わりとして、遺族にも送っていたものもあります。偵察任務の合間に書いた文章が、アメリカ軍から奪った紙を使って刷られました。また、インドネシアで死亡した兵士を悼む「別れ鳥」では、「無事に帰ったら美しい嫁さんをもらい、母を安心させてやる」と語り合った思い出などがつづられています。他の文集には戦地となった町の様子なども伝えられています。

企画展「レイテ島遺品展」が 2012 年 10 月 1 日～30 日の会期で開催されました。レイテ島は、日本からのフィリピン奪還を目指すアメリカ軍が上陸した地で、1944 年 10 月 20 日に戦闘が始まりました。日本軍は 8 万人以上の戦死者を出し、ほぼ全滅しました。遺骨収集に携わった糸島市の方が現地で収集したものを中心に 216 点を展示していました。青森県むつ市の方から寄贈された名札など 7 点も新たに公開しました。展示された道具類は、遺骨代わりに持ち帰られたものもあって、無言の道具類から、戦争について考えてもらうという趣旨で開かれました。

企画展「かかる兵士ありきー陸軍上等兵 福田直昌の戦争」が 2012 年 11 月～12 月 28 日の会期で開

催されました。日本軍が撒いた「伝単」、戦地で通貨代わりに発行された軍票、福田さんの仲間や戦地を慰問に訪れた歌手の写真など、福田さん（故人）が戦地から持ち帰り、生前、資料館に寄贈した 135 点の資料を展示していました。

企画展「軍事郵便はがき」展が 2013 年 1 月 25 日～3 月 24 日の会期で開催されました。日露戦争(1904～05 年) 時の絵はがき、旧満州（現中国東北部）から送られた郵便書簡、干支（えと）とみられるネズミが軍服を着たイラスト入りの年賀状、戦後にシベリアに抑留された兵士の捕虜用はがき、アメリカ軍が検閲し「OPENED BY」と書いたテープが残る封書など、約 250 点が展示されました。

Tel:09496-2-8565

○長崎原爆資料館：長崎

2012 年度第 1 回企画展「原爆資料館収蔵資料展」が地下 2 階の企画展示室で 2012 年 7 月 4 日～9 月 2 日の会期により開催されました。

2012 年度第 2 回企画展「軍需工場での青春一動員学徒と原爆」展が地下 2 階の企画展示室で 2012 年 9 月 13 日～2013 年 1 月 30 日の会期により開催されました。戦時中、労働力不足を補うために多くの学徒が軍需工場などに動員されていました。1945 年 8 月 9 日、長崎に原爆投下され、破壊された工場では、数多くの動員学徒が犠牲になりました。この企画展では、軍需工場の中でも爆心地の南北に工場があった三菱兵器製作所の原爆被害を中心に、そこで被爆した学徒の体験や遺品を紹介していました。

2012 年度第 3 回企画展「長崎<11:02> 東松照明写真展」が地下 2 階の企画展示室で 2013 年 2 月 14 日～2013 年 5 月 6 日の会期により開催されました。写真家・東松照明さんは、長年にわたり、原爆の実相と復興する長崎を撮り続けましたが、2012 年 12 月 14 日に亡くなりました。東松さんは、約 50 年の長きにわたり「長崎の被爆者と被爆遺構」を撮影し、長崎の若手写真家の育成と文化振興に寄与しました。被爆者を撮影することは東松さんにとっては単に被爆者を被写体として撮るのではなく、かけがえのない「生」を生きる、「個としての存在」を証明するものでした。この企画展は東松さんの功績をたたえ、その足跡を振り返る追悼展示でした。

Tel:095-844-1231 Fax:095-846-5170

<http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/peace/japanese/abm/index.html>

○沖縄県平和祈念資料館：糸満市

特別企画展「沖縄の人々と戦時下の暮らし」が 2012 年 10 月 10 日～12 月 9 日の会期により開催されました。沖縄人(ウチナーンチュ)が見てきた、戦争中(イクサ世)そして、戦後もアメリカに支配され続けたアメリカ世において、戦争に取り込まれた住民、戦後における米軍統治下の沖縄と、平和を求め立ち上がる沖縄人(ウチナーンチュ)について展示し、平和について考えるものでした。

八重山平和祈念館移動展「沖縄の人々と戦時下の暮らし」は 2013 年 1 月 19 日～2 月 26 日の会期で開催されました。

第 3 回子ども・プロセス企画展「太平洋戦争と学童疎開一ふるさとを遠くはなれて」が 2012 年 10 月 17 日～11 月 30 日の会期により開催されました。学童疎開について家族と別れ 2 年間の九州での苦難の日々を展示しました。

Tel:098-997-3844 Fax:098-997-3947

<http://www.peace-museum.pref.okinawa.jp/>

海外のニュース

●INMP 事務局より

ニケ・リスカルジェ

2012 年 10 月にハンブルグの画家・サイド・ダストマルチャン (Saeid Dastmalchian) が独自に「マイフェイスフォアピース (My Face for Peace)」を立ち上げ、世界中から平和を願う顔写真を募集しウェブサイトに掲載しています。同名のフェイスブックのアドレスは

<http://www.facebook.com/MyFaceForPeace?fref=ts>

顔写真がまず 1 万に達したら本にして世界中のキーパーソンに送り、世界平和への関与を求めるつもりです。また展覧会や啓発運動で世界に発信する。顔写真、メッセージそして世界各地の作家やジャーナリストから集めた 12 の平和のストーリーを掲載し

ます。ウェブサイトのアドレスは www.myfaceforpeace.org です。ぜひ訪ねてみてください

オランダ・ハーグにある平和宮の創設 100 周年記念行事として、ジーパック (GPPAC・武力紛争予防のためのグローバルパートナーシップ) はハーグ市の支援を受け、世界のアーティストの平和にまつわる写真、絵画、グラフィックデザインのオンラインコンテストを企画しています。

締め切りは 2013 年 4 月 10 日、どなたでも参加できます。5 名の入賞者の作品は 8 月から 9 月に開催される記念展覧会で展示されます。アドレスは以下の通りです。<http://www.peacegallerychallenge.org/>

●エンビジョン ピースミュージアム (フィラデルフィア・アメリカ)

エンビジョン水曜映画会

ドキュメンタリー映画「森林火災の猛威：生命の惑星を守る闘い」

A Fierce Green Fire: The Battle for a Living Planet

日時：2013 年 4 月 3 日 午後 6 時半～9 時
場所：フィラデルフィア・フレンドセンター
参加費：自由カンパ

4 月はアースデイ、地球月間です。エンビジョンは引き続き生態系保全に着目し 20 世紀の環境保護運動を追ったドキュメンタリー作品を上映します。子ども、コミュニティの未来を守るために闘った様々な人々の姿はあなたの心を揺さぶるでしょう。上映後は当館常任理事で 20 年来環境保護運動にかかわってきたマイケル・ガグネ氏と感想交流をおこないます。どうぞご参加ください。

<http://www.envisionpeacemuseum.org/>

●地球の子どもたち Children of the Earth

「12・12・12 ― 世紀に一度だけ、私の人生で一回だけの日：2012 年 12 月 12 日」

シムラン・ベドゥヴィアス (地球の子どもたちアラ

ブ首長国連邦、北インド代表)

この日、私はデュバイの学校の友達とアブダビへ行き、午前中は、じぶんの名前を付けた木を植え、道の掃除をしました。午後からも掃除をし、環境問題や自然破壊のことについてのメッセージを世界へ発信しました。夕方、世界で一番高いビル「ブリ・カリファ」の前で「あなたは何を持っている？」そして「何が必要なの？」という問いに答えていました。私は世界の子どもたちの代表として、子どもたちは社会の大きな部分を占めているのだから、もっと世界に向けて自分たちがのぞむ世界はどんなものかを伝え、広げないといけなと思っています。開発への合意形成の際に、まず子どもたちの要望、権利、期待を中心に据えて考えること以上に大事なことはないのです。子どもたちの想像力が国を活気づけます。私はこれからも人々の暮らしぶりを簡素にするために変化をもたらす人間でありたいと思います。世界を変えてきたのは、決意し行動してきたひとりひとりの個人です。今の課題は持続可能なライフスタイルを実現すること。わたしたちには自然を壊さず平和に生きるための責任があるのです。



私にとって、この日はわすれられない一日となりました。

●パソス ピースミュージアム

展覧会「わが心の平和」

会期：2013 年 2 月 21 日～3 月 25 日

会場：ニューヨーク・キンメルセンター

開会式：2 月 21 日午後 6 時半～8 時半

トークゲスト：アーティスト・ジョン・ノルトナー
2009年初めから、写真家ジョン・ノルトナーはさまざまな背景や考え方をもつ市民の平和についての考えを聞き取りをはじめ、白黒顔写真も同時に集めていきました。

パソス ピースミュージアムはこの展覧会を主催しディスカッションの場を設けます。詳しくはこちらへ。

http://www.pasospeacemuseum.org/virtual_museum/photography_main_page.html

●デイトン国際平和ミュージアム 講演会

「ピースウォーカー」ジェッセ・ブルー・フォレストが語るガンディーの「塩の行進」と徴兵

日時：2月17日（日）午後3時～5時

会場：デイトン国際平和ミュージアム

ジェッセ・ブルー・フォレストはデイトン出身の情熱的な平和運動家で良心的兵役拒否をした人です。彼はアメリカ先住民の子孫であることを誇りに思っており、歩くことが平和の実現に寄与すると信じています。

「私はピースウォーカーです。歩くことによって、ともに声を上げるように人々の心を動かしています」と話すジェッセは、徴兵制度廃止を求めてアメリカ国内1007マイルを歩いたあと、足の手術のためにオハイオ州デイトンに立ち寄りました。

西海岸へ向かう旅を再開する前に、彼はインドにわたり、1930年にガンディーが行った「海への塩の行進」の足跡をたどる旅をする予定です。ガンディーの家・サバルマティアーシュラムで、真実と非暴力を誓った「サティヤーグラハ（真実と愛から生まれる力）の誓い」を踏襲することにしています。3月12日、83回目の「塩の行進」記念日にジェッセとその仲間たちはガンディーと同様に241マイルの海への道をたどります。

この講演会の最後に、みんなで彼の杖に祈りをささげ寄付をする予定です。

インドから帰った後ジェッセは、アメリカでの行進を再開、西海岸へ向かいます。カリフォルニアから再び2年前にピースウォークをスタートした地点・ワシントンDCへ戻ってくるのです。詳しくは彼のフェイスブックへ。

<http://www.facebook.com/AbolishTheDraft>

デイトン国際平和ミュージアムは、市民ボランティアで運営されている非営利のミュージアムです。市民立で、平和をテーマにしたアメリカでも数少ない機関です。イベントや集会などを通じて「平和の文化を創出する」ことを目指しています。

Dayton International Peace Museum | 208 W Monument Ave | Dayton, OH 45402 US

<http://daytonpeacemuseum.org/welcome.htm>
info@daytonpeacemuseum.org

●Children's Peace Center

「ピースフル タイムズ」

私に何ができるの？

ジェーン・ロビンソン

公式的には、“地球の日”は地球を祝う特別な日となっています。しかし、毎日の小さな行動で地球を祝うことができます。

「そんな小さなことで、どうやってこの巨大な地球を変えることができるの？」と相手にしましょう。それでも、もし、あなたの近所、町、州、国または世界の全ての人、ひとりひとりの小さな行為が一つにまると、どれほど大きな変化となるか考えてみてください。

さあ、行動に移しましょう。



- ◆ 地球の命を大切にするよう、子どもたちに働きかけてください。どのようにするのか具体例を示してください。本を読み、ボランティア活動を行い、この地球という惑星をどのようにして助けられるか話し合ってください。庭を育てるのです。
- ◆ 電気を消す、再利用をする、使う水の量を減らす、詰め替え可能な飲料ボトルを使う、木を植えるなどほんの一例です。インターネットで他にもアイデアを探してください。
- ◆ 銀行振り込みへ切り替えましょう。給与を銀行

振り込みにすると、一人当たり年間約1ポンドの紙を節約できます。

- ◆ 肉の消費を減らしましょう。平均的な米国人は年間250ポンドの肉を食べます。週に1日、肉を食べない日があれば、84,000ガロンの水を節約し、400ポンドの動物廃棄物を減らし、人間が食べられるであろう245ポンドの穀物を蓄えることができます。
- ◆ 再利用可能な買い物袋を使いましょう。毎年、約1,000億個のビニールのレジ袋が捨てられています。分解されるまで約400年かかります。平均的な米国人は、年間500個から1,200個のレジ袋を使用しています。

ひとりの人間がどのようにして変化を起こすことができるか分かりましたか。私たちの地球はたった一つしかないことを忘れないでください。

●**チャールズ・ライトアフリカ歴史ミュージアム**
デルタ・シグマ・セータ・ソロリティ社デトロイト支部より（1913年から2013年の1世紀に渡る姉妹関係、学問、奉仕を祝う）

2013年4月6日から2014年3月31日

デルタ・シグマ・セータ・ソロリティのデトロイト支部がチャールズ・ライトアフリカ歴史ミュージアムと協同で100周年記念の展示会を開いています。ハーワード大学の女性22人が1913年1月13日にこのソロリティ（女性クラブ）を始めました。目的は、女性達が協力して学問の大切さを広め、困っている人達を援助するためです。最初の活動は、1913年にワシントンDCで行われた女性の選挙権運動のデモ行進でした。

1930年に法人化されたデルタ・シグマ・セータは、現在では20万以上の会員がいて、その大半は黒人の大学を卒業した女性です。900の支部がアメリカ、イギリス、日本（東京と沖縄）、ドイツ、バージン・アイランド、バミューダ、バハマ、韓国にあります。

デトロイト支部は1924年に当時のウェイン大学のキャンパスでタウ支部として始まりました。タウ支部は当時は大学生と卒業生の協同団体でしたが、1939年の5月13日にアルファ・パイ・シグマが卒業生の支部になり、タウ支部が学部生の支部になり

ました。1958年に「アルファ・パイ・シグマ」という名前が「デトロイト支部」という地域を表す名前に変わりました。この展示は、デトロイト支部が地域コミュニティに過去72年間に渡って貢献して来たその歴史や活動を紹介しています。

●**国際赤十字・赤新月博物館 ジュネーブ**
NEWSLETTER No 8

新装再オープン

このたび博物館が拡張され、5月に公開予定の常設展示も全面見直しされ、当館は生まれ変わりました。新しいロゴとともに、ホームページも刷新しました（www.redcrossmuseum.ch）。国内外の最高のグラフィックデザイン会社間でおこなわれたコンペの結果、当館は新しいイメージ作成の課題をIntegral Ruedi Baur Zürich社に委託することとなりました。Ruedi Baur氏とAxel Steinberger氏による提案は、的確かつ繊細であり当館の期待に応えるものでした。手描きのロゴで、「人を中心」とする当館を表現しています。

希望の旗艦：参加型で楽しいコミュニケーション・キャンペーン

できるだけ多くの方が再オープンのイベントに参加できるように、当館では、参加型で楽しめるコミュニケーションの大規模キャンペーンを行う予定です。閉館時におこなわれたキャンペーン同様、この2013年のキャンペーンは人々が何を言うべきか、アンリ・デュナンが1862年に初めて「ソルフェリーノの思い出」を出版して以降の人道の行動の基本的見地に基づいています。「希望の旗艦」と称されるこのイニシアチブは3月上旬に幕を開けます。スイス各地と近隣のフランスの多くの町を訪れる予定です。このページに希望を描いてあなたも参加しませんか。（www.redcrossmuseum.ch/en/exprimez-votre-espoir）。

再オープン式典

5月18-20日、その扉をついに開くことになる当館では、幅広い年齢層に楽しんでいただけるコンサートやあらゆるイベント（コンサートや諸活動など）を開催します。25周年にあたる当館を再発見してい

ただける、驚きに満ちたまたと無いチャンスにぜひご来訪ください。

VIP の来訪

去る 2 月 26 日、早速、要人の方々が来訪されました。左から順に、ドイツ連邦共和国のヨアヒム・ガウク大統領、「Restoring family links」エリアの建築家ディエド・フランシス・ケレ氏、博物館長ロジャー・マユー氏、赤十字国際委員会総裁のペーター・マウラー氏です。

国際赤十字・赤新月博物館

tel. + 41 22 748 95 01

fax + 41 22 748 95 28

www.redcrossmuseum.ch

●英国ブラッドフォードピースミュージアム ミュージアムギャラリー

新たな展示物としてジョセフ・ロートブラット卿の所持品コレクションが加わりました。

またブレンダ・トムソンよりオリンピックトーチとトーチベアラーのとき着用したウェアを借り、展示しています。人気を博しています。

近くノーベル賞受賞者の展示が新たに始まります。国際的展覧会バルカン「1+1 命と愛」への協賛もします。

ブラッドフォード平和探訪の道

ミュージアムは地域プロジェクト「平和探訪の道」をともに運営しています。季節イベントでは約 60 名の参加者に地元の子どもたちがミュージアムを熱心に案内しました。

6 月 26 日には新・ブラッドフォード平和史跡探訪ガイドなどを使って学校の子どもたちにピースメーカーガイドツアーを行いますので奮ってご参加ください。地元のフォークシンガー・ロジャー・デビスなども参加します。詳しくは

<http://www.routestopeace.wordpress.com>

企画

「ピースチャレンジ ブックレット」

国際ソロプチミスト協会は「ピースチャレンジ企画」として平和教育に焦点を当て、ミュージアムに寄付をお寄せくださいました。地域・平和教育にかかわるブックレットを発行し平和の作り手「ピースメーカー」を育てるための学校教員への平和教育活動のアイデアなどものせています。ミュージアムだけでなく町の書店でも購入できます。(6.99 ポンド)

「ピーストレイル・私たちの宝物」

宝くじ収益からの「受け継ぐストーリー」基金の力で「ブラッドフォード平和探訪の道」の新たなバージョンができました。ブラッドフォード市街地の「平和探訪の道」を子どもたちが案内する無料でダウンロードできるアプリや、無料のポケットガイドです。ミュージアムや観光案内所でもらえます。

教育と学習

9 月から始まる教育プログラム「チョイス：第一次世界大戦を違う角度から読み解こう」は内務省の学校教育企画の一つです。ブラッドフォードの教員養成カレッジと協力して教員を目指す若者と共に「過去の出来事と今起こっていることを考察し、どう対応するか、それが未来をどう変えるか、選択肢を模索する」取り組みです。指導教材も今年 11 月には出来上がります。企画は現在進行形、アイデア、資金歓迎します。

ミュージアムはこの 1 年、「ピースチャレンジ」、「スポーツ、勇気、平和と友情 (SCPF)」など人気のプログラムで地元だけでなく、南ヨークシャー、ハンバーサイドなどのたくさんの児童生徒を受け入れ、またブラッドフォード大学、カレッジ、リーズメトロポリタン大学、ユトレヒトやラトビアからの学生グループも来館しました。ブラッドフォードカレッジ教員養成基礎コースの人権、公民権教育分野にも貢献しています。今後も継続し、前述の「チョイス」プロジェクトも推進します。

データ

昨年は来館者が急増しました。2012～2013 は 882 名の一般来館者でしたが、うれしいことは 7037 名の子どもたちがミュージアムが企画した平和教育ワークショップに参加したことです。展示物も 6000 を超

え、その管理と活用の責任を担っています。

開館

水曜から金曜の午前10時から午後4時まで 但し予約があれば他の日も開館します。

問い合わせ先

diane.hadwen@peacemuseum.org.uk

info@peacemuseum.org.uk

電話 01274 780241

ウェブサイト www.peacemuseum.org.uk

ツイッター@PeaceMuseumUK

フェイスブック The Peace Museum

●自殺に関する映画について：「自殺者 10000 人を救う戦い」

自殺者が多い日本は、平和と言えるのでしょうか？この映画を通して、考えてみると良いでしょう。

作品概要

自殺との戦いにおいて、「敵」はいったい誰なのか。映画『Saving 10,000 - 自殺者 1 万人を救う戦い』は、日本の高い自殺率の真の原因究明に挑む一人のアイランド人の物語である。作品を通じて、日本のマスコミによる自殺報道のあり方、経済的圧力、うまく機能していない精神医療制度などの重要な問題が浮かび上がってくる。第一線で活躍する専門家から一般人まで、約 100 人へ取材し、日本がどうすれば自殺との戦いに勝利できるのか、具体的な方策を提示している。しかし、自殺の話題がタブー視されている日本で、一体どのくらいの人が耳を傾けてくれるのだろうか。

映画「自殺者 1 万人を救う戦い」は、レネ・ダイグナン監督と、マーク=アントアン・アスティエの撮影による 52 分のドキュメンタリー映画です。低予算で制作されたドキュメンタリー映画ですが、多くのメディアから注目され、レネはこれまでに 20 回以上のインタビューを受けてきました。政治家からの関心も強く、大臣や副大臣からも映画を見たいと申請を受けています。上映会は国会議員会館でも開催されました。レネは内閣府自殺対策推進室とのミーティングの機会に恵まれ、自殺防止について意見を交わしています。日本の主要メディアからも取り上げられ、日本各地から多くの上映会の依頼が届いていま

す。社会から大きな関心が寄せられ、また日本における自殺への認知度向上は急を要することだと考え、レネは映画をオンラインで無料公開することを決めました。公開上映会を行いたい団体、大学、NGO へは無償で DVD を提供させていただきます。

レネは本業と並行して、映画監督としても可能な限り講演会等の依頼にもお応えできるよう努力して参ります。ご依頼やお問い合わせは rene.duignan@gmail.com までどうぞ。
<http://www.saving10000.com/ja> より



『自治体の平和力』

岩波ブックレット、500 円＋税

自分たちのことは自分たちで決める。これを「自治」という。自治体は、私たちの生活に必要な行政サービスを提供する。自治体を「活用」し、自治体と市民とが協働することによって、「平和」をつくることは可能だろうか。例えば、核兵器のない世界をめざすために、自分たちの住む世界を攻撃目標としないしてほしいと訴えるキャンペーンを平和市長会議が呼びかけている。自治体を足場に、平和を求める活動の可能性を探ることの可能性を探りたい。

『大切なものって何だろう—核・震災・そして文学』

寺沢京子著、竹林館、2012

〈目次〉

桃の花／かざぐるま／この道／日記から—阪神大震災／表情

マージナルな場／紙ふうせん／若者たち／浄水器／女性専用車両

タラント／廃線のトンネル／「なぜ」／大切なことって何だろう

父の思い／スポットライト／沖縄／母／ロンドンへの旅／福島から花巻へ

一つのメルヘン／エンデのファンタジー／隠喩—高野喜久雄の詩において

比喩の魅力—天野忠の詩／機会詩について／神戸—
神の戸口

ヒロシマというとき／生への希望—原爆文学において／自然と人間

メディアと想像力—英国女流詩人のヒロシマ・ナガサキ

過去と未来をつなぐ／宮沢賢治の童話から学ぶ

『「原発ゼロ」プログラム—技術の現状と私たちの挑戦』

安齋育郎（編集） 舘野淳 竹濱朝美

かもがわ出版、2013年3月

福島原発事故がどうようにして起こり、何をもちがらしたのかを改めて概括し、日本が再生するためには何が必要か、原発依存から脱却するためにどのような課題と展望があるのかを明らかにしようと試みたものです。

編集後記

お仕事をしながら翻訳を下さった瀧由里子氏、竹田敦子氏、今井てるみ氏、谷川佳子氏に大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。

年2回の通信ではなかなか交流できないので、メールで交流をしています。関心のある方は、事務局へご連絡下さい。

それにしても、「慰安婦問題」が奇異な形で社会的な話題にされた中で、日本平和学会が「女たちの戦争と平和資料館」(wam)に第4回平和賞を授与することを決定したことは、非常に意義深いことと思います。平和博物館の仲間が、世界有数の平和研究学会である日本平和学会の厳しい選考過程を経て受賞したことについて、wamの関係者に改めて敬意と謝意と祝意をお伝えするとともに、これを励みに平和博物館どうしが伝え合い、学び合い、協力し合って、国内外の平和博物館運動の一層の発展のために努力したいものです。(安齋)

最後になりましたが、編集委員の安齋育郎氏も日本平和学会で平和賞を受賞されました。おめでとうございます！(山辺、山根)

INMP 情報

平和のための博物館国際ネットワーク (International Network of Museums for Peace, INMP) は、まだ生成途上の脆弱なネットワークで、会員もそう多くありません。そこで、世界の平和博物館運動の前進を応援し、国境を越えて平和の活動を伝え合い、協力関係を発展させるために、日本の登録会員も大いに増やそうと、できるだけ気軽に加入登録が出来、会費の国際送金などの煩瑣な手続きもしなくて済むように、事務を代行する仕組みが INMP の理事会承認のもとで作られました。

INMP の登録会員になりたい方は、下記にご連絡頂ければ、登録事務と会費納入を代行するとともに、年間2回の目標で、INMP のニューズレターの日本語版もお送りします。2014年9月には韓国のノグンリで第8回国際平和博物館会議が開かれる予定ですが、その関連の情報も得られるでしょう。奮ってご参加ください。

〒600-8216

京都市下京区東塩小路町 547-4
ステーションコートヤード 802 号室
安齋科学・平和事務所 INMP 担当
電話：075-741-7267 (月・水・金午後)